

# 厚生委員会 委員会視察報告

令和7年12月3日

委員長 山本 ひとみ

視察行程 令和7年10月22日から同月24日まで

10月22日 宮城県

ひきこもり支援について

10月23日 盛岡・紫波地区環境施設組合

ごみ減量収集の取組について

宮城県大崎市

高齢者の集いについて

10月24日 岩手県盛岡市

盛岡市スポーツを通じた健康づくりの推進に関する条例、

健康づくりアプリ「MORI-WALKER」について

視察者 委員長 山本ひとみ

副委員長 山崎たかし

委員 東山あきお 浜田けい子 蔵野恵美子 本間まさよ

厚生委員会（令和7年10月22日から同月24日まで）

日 時	令和7年10月22日 午後1時から午後3時まで
視察先	宮城県
テーマ	ひきこもり支援について
目 的	宮城県の行っているひきこもり支援施策を聞くことで、武蔵野市でもより有効なひきこもり支援策を考える。
内 容	<p>宮城県では、平成26年1月に「宮城県ひきこもり地域支援センター」を宮城県精神保健福祉センター内に開設し、翌平成27年8月には「宮城県ひきこもり地域支援センター南支所」を仙台市内に設置した。南支所の運営はNPO法人わたげの会に委託されており、ひきこもり当事者及びその家族への支援に加え、ひきこもり支援に取り組む団体への支援や普及啓発事業を展開しているところである。当センターにおいては、当事者及び家族に対する個別相談の実施、さらには家族会を通じた支援を行っている。家族会は、同じ悩みを抱える家族同士がつながる場となっており、家族自身が心身の安定を取り戻すとともに、当事者への理解を深める機会として機能している。また、支援者支援の一環として「ひきこもりサポートブック」を作成し、支援者が家族とともに「今できること」、「現在の状況」、「今後の支援方針」等について整理・検討するためのツールとして活用しており、家族支援を円滑に進める工夫がなされている。</p>  <p>さらに、新たな取組としてオンライン居場所「おらんちラウンジ」が実施されている。この取組は、対面型の居場所にまだ参加できない当事者の“入り口”となることを目的として開始されたものであり、視察においてはオンライン操作の体験も行った。初回問合せの多くは家族からであるが、登録に至るのは約1割程度である。一方で、本人から直接問合せがあった場合は、ほとんどが登録に至っているとのことである。また、全体の約2割はこれまで支援団体と接点のなかった層であり、新たな支援対象へのアプローチに寄与している。この2年間で23名が登録し、そのうち8名が対面の居場所支援へ移行する成果も確認された。今回の視察を通じ、宮城県におけるひきこもり支援は、行政、NPO及び地域が連携しながら、当事者と家族双方に寄り添う形で継続的に展開されていることを確認した。特に、オンラインによる居場所づくりは新たな支援形態として有効性が示されており、対面支援への橋渡しとして重要な役割を果たしていると評価できる。</p> <p>今後も、こうした多様な支援方法の充実を図りつつ、地域全体でひきこもり支援を総合的に推進していくことが重要である。</p>
成果（参考になった点）、課題等	<p>「ひきこもりサポートブック」を活用することで、どの団体においても一定の水準で支援を実施できる体制が整い、結果として多様な関係団体が支援に参画しやすくなる。また、家族にとっても支援の全体像が可視化されることで安心感が得られ、支援の継続性が高まるといった利点がある。</p>

さらに、オンライン上の居場所づくりの取組も注目すべき要素である。これまで支援組織と接点を持たなかった当事者自らがオンラインを通じてつながりを形成することで、新たな支援の入口が生まれる。「オンライン居場所」を柔軟に設計・運用することにより、リアルとネットの双方から人と人がつながる機会を拡大できる。その結果、誰も孤立しない地域社会の実現に一步近づく。

厚生委員会（令和7年10月22日から同月24日まで）

日 時	令和7年10月23日 午前9時から午前11時まで
視察先	盛岡・紫波地区環境施設組合
テーマ	ごみ減量収集の取組について
目 的	盛岡・紫波地区環境施設組合清掃センターでは、ごみの分別を細かくして回収し、施設でのリサイクルも重視して行っている。この取組を学び、武蔵野市のごみ行政に生かしていく。
内 容	<p>盛岡・紫波地区環境施設組合は、岩手県盛岡市の南、矢巾町にあるごみの処理を行っている施設である。対象地域は、盛岡市の旧都南村区域・紫波町・矢巾町であり、令和6年4月1日の人口は、108,392人である。組合設立は昭和43年だが、土曜・祝日も稼働していることから土曜回収を行っている。施設の面積は約45,000㎡あり、令和5年の1年間のごみ処理量は、36,145,370キログラムとなっている。</p> <p><b>【施設の見学】</b></p> <p>会議室での説明の後、焼却施設（160トン/日）、不燃物資源化施設（20トン/日）、容器包装リサイクル推進施設（30トン/日）、リサイクルコンポストセンター＝堆肥化施設（20トン/日）の見学を行った。施設管理部門、焼却施設、受け入れるプラットホームのほか、リサイクルを行っている施設を説明を伺いながら回った。容器包装リサイクルセンターは、3Rの推進を目標に平成22年から稼働しているが、プラスチックだけでなく、紙製品も行うラインがある。紙製品のリサイクルでは、リサイクルマークのあるティッシュペーパーの箱やアイスクリームの容器なども行っている。分別が大変ではないかと考えられたが、町では、スマホをかざすことによって分別を明らかにするアプリも開発したとのことだった。また、燃えるごみの中で、食材の残さなどの生ごみを別にして専用の回収ボックスを設け、「田園有機」という堆肥を作り1袋350円で販売している。これは、堆肥を使うことの多い地域ならではの取組と感じた。このように、様々な形でリサイクルを行うことは、ごみの減量に貢献する重要な取組だと思う。</p> <p><b>【駅にある回収施設】</b></p> <p>清掃センターの視察の後で、矢幅駅にあるコンタクトレンズの回収ボックスを見学した。専用の回収ボックスで、多数の回収が確認できた。駅という多くの住民が利用する場所に、回収ボックスがあることは利便性が高い取組だと痛感した。</p>
成果（参考になった点）、課題等	<p>何よりも、ごみに掛ける予算を減らしたいという町の姿勢が明確であり、分別を行い、様々なリサイクル設備を稼働させている。住民の福祉のため、こうした考えの下で施設が運用されていることが印象に残った。分別に関しては、地域の会合で相互の働き掛けが機能していると報告があったが、都会である武蔵野市では難しい側面があり、別の手法を考える必要があるのではないか。</p>



厚生委員会（令和7年10月22日から同月24日まで）

日 時	令和7年10月23日 午後2時15分から午後4時15分まで
視察先	宮城県大崎市
テーマ	高齢者の集いについて
目 的	介護予防、健康作り・仲間作りを目的に進めている、大崎市の高齢者の集いを視察し、高齢化が進んでいる本市の高齢者施策の参考にする。
内 容	<p>大崎市は、宮城県の北西部に位置する市で、平成18年古川市・松山町・三本木町・鹿島台町・岩出山町・鳴子町・田尻町の1市6町が合併し現在の市域となっている。令和7年4月1日現在の人口は121,226人であり、高齢化率は32.6%、高齢者世帯は53,052世帯となっている。人口は少しずつ減少しているが高齢者は増えている。また、令和7年度の要介護者認定数は7,785人で、認定率は19.7%である。</p> <p><b>【高齢者の集い】</b></p> <p>大崎市は、地域における自主的な介護予防に資するため、おおむね65歳以上の高齢者が自主的に集う高齢者の集いを支援している。支援は、活動計画や開催、実施しようとする団体の開拓、活動サポーターの育成等である。高齢者の集いの内容は、ゲームや歌・体操など企画した事業、運動・栄養・口腔ケアなど介護予防普及啓発事業、交通安全教室や認知症サポーター養成講座など市や社会福祉協議会の出前講座を利用した事業、会食など多岐にわたっている。令和6年度は、全行政区の半数で実施されており、実施団体は167団体である。中心で運営しているのは区長・民生委員の方などで、民間の力が生かされている。</p> <p><b>【いきいき百歳体操】</b></p> <p>大崎市では一般介護予防事業として「いきいき百歳体操」が行われており、対象者はおおむね65歳以上の高齢者で、5人以上の住民が組織する団体である。この団体に体操のDVDを支給し、体操用の重りを貸与している。この体操は、車椅子の方もでき、簡単な内容ということで、朝楽に起きられるようになった、血糖値が下がってきたなどの効果も出ているとのことである。また、この体操と併せて、口腔機能向上のため「かみかみ百歳体操」や音読の勧めも実施されている。</p> <p><b>【市役所1階の見学】</b></p> <p>1階の入り口脇には、民間事業者の経営するカフェがあり、市民が飲食を楽しみながらゆっくりできるスペースとなっていた。</p>
成果（参考になった点）、課題等	<p>高齢者の集いは、市の直営でない事業で高齢者が集まって健康作り・仲間作りをすることを援助するもので、きめ細かい事業であると感じた。DVDを支給する百歳体操は効果も上がって頼もしい。一方、高齢者の集いを中心になって運営する方が民間で必要であり、このことは課題となる可能性もあると感じた。</p>



厚生委員会（令和7年10月22日から同月24日まで）

日 時	令和7年10月24日 午前10時から午前11時30分まで
視察先	岩手県盛岡市
テーマ	盛岡市スポーツを通じた健康づくりの推進に関する条例、健康づくりアプリ「MORI-WALKER」について
目 的	盛岡市の「MORI-WALKER」を聞くことで、武蔵野市での健康促進施策について考える。
内 容	<p>市民の健康増進と地域経済の活性化を目的として盛岡市が導入した健康促進アプリ「MORI-WALKER」について話を聞いた。</p> <p>その開発の背景には、令和2年度における盛岡市内の成人の「週1回以上運動する人の割合」が44%と低い水準にとどまっていたことがある。加えて、「第2次もりおか健康21プラン」の中間評価においても、健康診断の受診率、子どもの肥満傾向、運動を意識する人の割合といった項目が目標値に達していなかった。さらに、コロナ禍によるスポーツイベントの中止が相次いだことから、市民の間で「体を動かしたい」という声が高まっていた。こうした状況を受け、市民が気軽に健康づくりに取り組めるきっかけを提供するために開発されたのが「MORI-WALKER」である。本アプリは、地域電子マネー「MORIO-Pay」と連動しており、健康活動の促進とともに地域経済の循環を生み出す仕組みを備えている。</p> <p>アプリの主な機能としては、歩数計のデータ連動に加え、歩数ランキング機能が搭載されており、個人だけでなく企業単位でのランキングも確認できる。年間を通じて上位に入った企業には「健康づくり企業表彰」が実施され、職場単位での健康意識向上にもつながっている。</p> <p>歩数の達成、健康診断の受診、健康イベントへの参加などにより「健康ポイント」が付与される仕組みも導入されている。獲得したポイントは1,000ポイントを1口として「MORIO-Pay」抽選に参加でき、抽選で5名に500円分、外れた場合でも5円分の「MORIO-Pay」が付与されるなど、継続的な参加意欲を高める工夫がなされている。</p> <p>なお、「MORI-WALKER」の開発は、「MORIO-Pay」を手掛けたフェリカポケットマーケティング株式会社が担当しており、さらなる予算の確保により、今後も機能拡充が可能であるとされている。</p>
成果（参考になった点）、課題等	<p>今回の視察を通じ、地域デジタル通貨との連動は、今後の市民サービスが向上するものであり、その活用範囲の広がりにも可能性を感じる。また歩数ランキングで企業を巻き込むなどの発想は参考になる。</p>

